

外國の文獻の吸収に卓抜した才能を示す日本の學者の前に、今や新しい攻撃目標が提出されたものといわなければならぬ。(市村眞一)

ブリューミン

『現代英國ブルジョア經濟學批判』

И. Г. Блюмин, Критика Современной Буржуазной Политической Экономии Англии. Москва 1953, pp. 359.

マルクスとエンゲルスが當時のブルジョア經濟學——古典派經濟學——の批判に非常な努力を拂ったことは周知の事實であるが、彼らは、1870年代のはじめに擡頭して、その後のブルジョア經濟學の發展に決定的な影響を及ぼした效用學派については、2, 3の挿話的な言及をしただけで、詳しい批判をくわえなかった。したがって、マルクス主義的立場から近代主觀學派の經濟學に批判的検討をくわえるという仕事は、後代のマルクス經濟學者の課題として残されたのであるが、今日にいたるまで、この課題は十分には果されていないといってもおそらく誤りではないであろう。もちろん、ブハーリンの『金生活者の經濟學』やヒルファードィングの一連の勞作のことはいまさらいわないとしても、その後のソヴェトや英米のマルクス經濟學者によって、この分野の研究がすすめられなかったわけではないが¹⁾、たとえば、古典學派にたいするマルクスの『餘剩價値學說史』に量質ともに匹敵するような勞作はまだ現われていない。ところで、今日、世界で最大最高のマルクス主義經濟學者スタッフを擁しているのは、おそらくソヴェト同盟であるとすれば、このような勞作の出現をまず第1にソヴェトの經濟學界に期待するのは當然のことであろう。事實、ソヴェトの經濟學者自身が意識的にこのような課題を自らに課していることは、つぎのような言葉によっても察知できる(これは「ソヴェト經濟科學の任務」について論じた雑誌『コムニスト』の巻頭言の言葉である)。

「帝國主義反動の辯護論者、擁護者たちは、運命がつきて死滅しつつある資本主義を救う方法を、百方手をつくしてさがしとめてゐる。資本主義諸國の出版界は、いろいろな方法でブルジョア秩序を讚美し美化する……文獻で充滿している。先進的經濟科學の代表者であるソ

ヴェトの經濟學者には、反勤勞者的なこれらの思想や見解を系統的に假借なく曝露するという責任ある任務が課せられている²⁾。」と。

ここにとりあげたイ・ゲ・ブリューミンの勞作『現代英國ブルジョア經濟學批判』は、ソヴェトの經濟學者が近代經濟學の批判という課題を眞正面からとりあげたまとまった勞作として、他にあまり例のないものである(もちろん、このような問題にかんする小冊子は他にもあるし、雑誌『經濟學の諸問題』はほとんど毎年數回は近代經濟學批判の論文を掲載している)。いままでのところブリューミンの書物については、『經濟學の諸問題』(1954年第7號)に簡単な内容紹介がある以外、ソヴェト國內での書評はまだ現われていないから、本書が彼の以前の多くの勞作のように、國內で厳しい批判をうけるか、それとも高く評價されるかはまだわからない。また、本書が(近く邦譯が刊行されるようであるが)日本の讀者にどのように受けられるか、本質的な點をついたすぐれた近代經濟學批判の書と評價されるか、過度に超越的な皮相な批判とみなされるかは、おそらく讀者の立場によっても異なるであろう。

著者ブリューミンについては、ソヴェトの他の經濟學者の場合とおなじく、くわしい生いたちや經歷はしられていない。彼はかつてクルノーの『富の理論』を露譯して、競争條件のもとでは勞働價値説が妥當するが、獨占の存在する場合にはクルノーの理論が妥當すると主張して、痛烈な批判をうけたことがある³⁾。彼はまた1930年代のはじめに『經濟學における主觀學派』という大著をかいたが、その第2卷「數理學派⁴⁾」をみると、クルノー、ドミトリエフ、ゴッセン、ジェヴォンズ、ワルラス、カッセル、パレートの理論を、詳細に數式や圖表を引用して祖述したもので、ほとんど一般の數理經濟學概説書と大差ないような觀を呈している。もっとも、同書において、彼は「數のフェティシズム」におちいる危険を指摘しているけれども、大たいにおいて、近代經濟學者の發展させた數學的分析方法をマルクス經濟學に「攝取」という立場をとっていたようにみうけられる。また、戦後においてもブリューミンは1948年にケインズの『一般理論』のロシア語譯が出版されたとき⁵⁾、

2) “Коммунист” No. 22, 1952, стр. 10.

3) 『コムアカデミー通報』第20號。ブリューミンは『資本主義的企業結合論』(1934年)において、この見解を改めた。

4) И. Г. Блюмин, Субъективная Школа в Политической Экономии, Том II, Математическая Школа, 1931.

5) Дж. М. Кейнс, Общая Теория Занятости, Про-

1) Cf. N. Bukharin, *Die Politische Oekonomie der Rentners*, 1926. R. Hilferding, *Böhm-Bawerks Marx-Kritik*, 1904. N. Bukharin, *Eine Oekonomie ohne Wert* (“Neue Zeit” 1913/14 B. I).

これに序説を執筆したが、これもまた痛烈な批判を浴びた。ブリューミンの序説は「非而似アカデミズムと客観主義の諸要素に冒されて」いて、「ケインズの饒舌をくわしく祖述するに止って、これに黨派的な批判をくわえていない」と批判された⁶⁾。したがって、以上の経過から判断すると、ブリューミンはマルクス経済学者に珍しく近代経済学の内容についてかなり深い造詣をもっているが、そしてマルクス主義的立場からこれを批判しようとする意図をもっているが、それにもかかわらず、しばしば近代経済学にたいする批判的態度を徹底させることができず折衷主義や修正主義に陥り、たびたび批判をうけてきた人らしい。

ブリューミンはおそらく本書の執筆にあたっては、以前に自分のうけた批判を十分考慮したであろうし、事実、本書は舊著『主観学派』などに比較すると、よほど調子のちがったものになっている。本書の構成を簡単にのべると、第1章と第2章は序論的な部分で、現代英國ブルジョア経済学の發生の基盤である現代イギリス資本主義の分析(第1章)とマルサスからシーニョア、ジュヴオンズ、マーシャル、ピグーをへてケインズにいたるまでの近代経済学發展史(第2章)にあてられている。この序論につづいて、第3—6章では4つのテーマがとりあげられている。すなわち、独占と國家独占資本主義の問題(第3章)、賃銀と失業の問題(第4章)、景気循環理論と恐慌対策の問題(第5章)、帝國主義的植民地制度と戦争經濟の問題(第6章)がそれである。本書全體を通じて批判の焦點はケインズにむけられているが、それは「ケインズ学派」(Кейнсианство)が、ブリューミンのいい方によれば「現代ブルジョア経済学の典型的なあらわれ」(p. 89)だからである。しかし、その反面、ブリューミンはケインズ理論が本質的にはJ・B・セイの理論と全く同一の機能と役割をはたしているにすぎないということを強調している(p. 89)。この一見、逆説的とみえる主張が、實は、ブリューミンの「近代経済学觀」のキイ・ポイントである。つまり、ブリューミンによれば、セイの販路法則とケインズの有效需要の法則とがいかに異っているにせよ、兩者はともに「資本主義の擁護と正當化」という機能をはたしている點では全く同一であり、ただ資本主義がまだ上向線をたどって發展しつつあった時期には、資本主義的秩序にたいする樂觀的な賞賛と手ばなしの贊美が典型的であったのにたいして、資本主義の矛盾が著しく露呈されたいわゆる資本主義の全

般的危機の時期には、資本主義制度の「缺陷」(例えば構造的失業)をあるていどまでみとめて、しかもこれを資本主義のわくの中で(たとえば國家の介入や金利操作によって)、一見、社會政策的=社會改良的な方策によって(たとえば完全雇傭)、實は勤勞者の犠牲において(たとえばインフレーションによる實質賃金の切下げ)、「解決」できるかのように説くのが、典型的だといふのである⁷⁾。

ケインズ理論にたいするこのような評價から容易に察知されうるように、経済学説の發展——たとえば近代経済学史——にたいするブリューミンの接近方法は、近代経済学者の場合と丁度對照的である。つまり、彼は學説の發展を現實分析の用具(tool)の進化としてはみないで、専らそれがはたす社會的・政治的機能の觀點から觀察している。彼は序文において、本書執筆のねらいをのべて、それは「現代英國ブルジョア経済学の階級の本質」を明かにし、その「反科學性」と「反勤勞者的、帝國主義的傾向」(p. 7)を明かにすることにある、とのべたが、おそらくその含みは彼が近代経済学の個々の學説の理論的缺陷や内的非一貫性をつくつというやうなことをやりかひのある仕事と考えなかつたという意味であろう。彼は全編を通じてこの態度を一貫させている。そのおかげで、多分、彼は以前に批判をうけたやうな「非而似アカデミズムと客観主義の諸要素におかされる」ことをまぬがれたかもしれないが、そのかわりに敘述がいくぶん單調で反復の多いものになっている。つまり、國家独占資本主義の問題においても、雇傭の理論においても、恐慌と景気循環の問題についても、彼はつねに同一の「階級の本質」、同一の「反勤勞者的、帝國主義的性格」をくりかえし指摘しており、しかもこの點の指摘に終始しているからである。もちろん、このような本質的な點の指摘は重要であり、おそらく不可缺でさえあろう。だが、

7) ブリューミンは單にケインズ理論が客觀的にはたす役割を指摘しているだけでなく、ケインズが自らの理論を構成するさいに意識的にこのような目的を追求していたと主張している。たとえばケインズは『一般理論』の執筆中にJ. B. ショーへの手紙の中で、彼の「理論」がマルキシズムの基礎をくつがえすだろうとのべている(R. F. Harrod, *The Life of John Maynard Keynes*, 1951, p. 462)が、このことは、ブリューミンによれば、全般的危機のもとでの資本主義の擁護という任務をケインズが十分意識していたことを示すものであり、したがってまた、それは「ポリシェヴィズムの假借なき敵」というかつてレーニンがケインズにたいしてあたえた特徴づけ(レーニン全集、第31卷、199頁)の正しさを裏がきするものである(p. 90—1)、とブリューミンは主張している。

цента и Денег, 1948.

6) “Вопросы Экономики”, No. 1. 1950, стр. 114.

ある學説を批判するという場合、それがはたしている社會的機能と政治的役割を單に指摘するだけではたして十分かどうかは疑わしい。この場合、もちろん、問題は單に批判の手法にあるのではなくて、もっと深い所にあるようにおもわれる。つまり、批判の對象となっている學説が取扱っている問題について——たとえば國家獨占資本主義の經濟法則や恐慌とインフレーションの法則について——批判者自身が十分明確な自らの積極的見解をもっているかどうか問題である。マルクスが古典派經濟學者の餘剩價值にかんする見解の非科學性と階級性をあのように感銘ふかいやり方で徹底的に曝露することができたのは、マルクス自身が餘剩價值の問題をあますところなく解明していたからにはほかならないと考えられるからである。ブリューミンはしばしば近代ブルジョア經濟學の「階級性と非科學性」について語っているが、實際には、「階級性」の指摘に止って、「非科學性」の曝露にまで到っていないようにおもわれる。もちろん、「階級性」と「非科學性」は不可分の關係にあり、本質的に

け同一であるとしても、決して單純な同義語とみなすことはできない。兩者のむすびつきを著者がもっと詳細に具體的に解明したならば、本書の議論はもっと精彩あるものになったであろう。

ブリューミンの書物は、マルクス主義經濟學の教育を受けていて、近代經濟學についてはあまり知る所の少い人が、近代經濟學についての一應の批判的概念をえるのには役だつてであろうし（本書はほかならぬソヴェトの讀者を對象にしてかかれたものである）、また、近代經濟學をなにか「中立的」な分析道具だと考えている人やケインズ學派がたとえばロンドン・スクールより「進歩的」だと考えている人にたいしては、若干の示唆と教訓をあたえることができるかもしれないが（著者はケインズ理論の擁護者としてのイギリス労働黨の批判にかなりのスペースをさいている）、近代經濟學と資本主義體制の擁護を自らの理論的・政治的信條とする人にたいして、本書のような批判がどれほどの説得力を有するかは疑わしい。（岡 稔）